九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

自己のほど : アリストテレス『ニコマコス倫理学』序論の基礎的理解を求めて

水崎, 博明

https://doi.org/10.15017/1398233

出版情報：哲学論文集. 25, pp.61-82, 1989-12-25. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

自己のほど

——アリストテレス『ニコマコス倫理学』序論の基礎的理解を求めて——

水崎博明

一

我々のテクストを一つの比較の中にもたらしつつ考察を始めようと思ふ。それはかのヘーラクレイトスの次の断片との比較である。これらは、それぞれを全体として見れば、ほぼ同様の探求を示すもののやうに察せられたからである。またそれらは相俟って、右の如き論題でもって論ずることの可能性を、筆者に示唆するものでもあった。かうした出発で出発する行方がどういふものとなるかは、まさに行方そのものが、我々に対して明らかにするであらう。それ故、何はともあれ先づその比較をここに提出しよう。

＊　魂の果ては、行けばこれを汝が見出すといふわけでのものではないのだ。例へ、よしすべての方途を尋ねゆきながら、といふにもせよ。そのやうに、それは深いことわりを持ってゐるのだ。　（ヘーラクレイトス『断片』四五、拙訳）

これに対しアリストテレス『ニコマコス倫理学』冒頭は、目差す目的のため、テクストと二三の訳文を一応挙げる。(1)

* Πᾶσα τέχνη καὶ πᾶσα μέθοδος, ὁμοίως δὲ πρᾶξίς τε καὶ προαίρεσις, ἀγαθοῦ τινος ἐφίεσθαι δοκεῖ· διὸ καλῶς ἀπεφήναντο τἀγαθόν, οὗ πάντ' ἐφίεται. (テクスト)

* Every art and every inquiry, and similarly every action and choice, is thought to aim at some good; and for this reason the good has rightly been declared to be that at which all things aim. (ロス訳)

* いかなる技術、いかなる研究も、同じくまた、いかなる実践や選択も、ことごとく何らかの善（アガトン）を希求していると考えられる。「善」をもって「万物の希求するところ」となした解明の見事だといえる所以である。(高田訳)

* どのような術もどのような論究も、行為も選択もみな同じように、或るひとつの善いものを目ざしていると考えられる。それゆえ、或るひとびとが「善」を定義して「ものみなの目ざすもの」と言い表したのは当っている。(加藤訳)

* すべての技術とすべての方法とは——しかし同様に行為と選択とにしてもあるわけだけれども——何らかの善きものの場において自分といふものを【行為の中で】送りつけるもののやうに、思はれる。それ故に、見事にも、人々は自己の見解をその善きものに鑑みては表明したことであったが、つまりはそれは「そのものにおいてこそ、すべてのものは自分といふものを送りつけてゐるのだ」といふことなのである。(2) (拙訳)

ヘーラクレイトスの断片は、恐らく人が、もうこれを一つの箴言とも見るやうなさういふものであらう。それは、彼のその他の断片「ことわりは、このものとしてあるといふのに、いつも人々は耳ふたがれた者となるのだ、云々」(断片一)「われに聞くにあらず、ことわりに聞きて万有が一たるを同意するが賢きこと」(断片五〇)「魂においては、ことわりは、自らを増大させながらことわりなのだ」(断片一一五)といふやうな断片などとも考へ合はせられると、「ことわりの思想」とい

ふものを、〃暗き人〃の一つの謎として、しかし一種の透明度を既に獲得したその明らかさとともに、我々に対しては現はしてゐるとも見えるから。緊張の完璧の上で初めて達成される明らかさそのものを、ただ深く箴言として語るばかりのかうした思索を前にして、さて我々のテクストはどのやうに測り出されて来るであらうか。

先づ誰にとっても明らかにさう思はれようことは、我々のテクストは如何にもまさにテクストと呼ぶにふさはしいさういふ思索の書きつけられたものであるといふそのことだらう。それは、最早決して善くも悪しくも箴言ではない。「緊張と透明と」といふのではなく、それは日常の弛緩の中で、だが落着いて、議論してゆくだけの「対処とその重みと」といふ姿で立ち現はれてゐるだらう。しかしまた、よく見れば、拙訳は論外に置くとして、高田訳・加藤訳を通して伺はれるアリストテレスにより起筆されたこの文章は、彼の他の重要な著作の冒頭にもよく見られるやうに[3]、一方では何か属目すべき名文だとも現はれ、しかも他方では、もし我々が必要な用心を怠るならばまた何か取りつくしまもない仕様のなさといふものに我々読者を陥らせるやうな、さういふものとも現はれはしないだらうか。少なくとも筆者にはさう現はれるのである。人は、かの『形而上学』冒頭の「すべての人間は、本性上、知ることを欲する」などといった名文をも、ちゃうどそのやうな典型的な例として持つのではないか。余りにも人口に膾炙したこの名高い一文も、我々が以下で検討するつもりのその〃欲する〃といふ言葉が、――それは彼らの言葉で *ὀρέγονται* と言はれる言葉であるわけであるが、それら翻訳として採用された言葉の方であれ、原語のほうであれ、そのどちらであれともに言葉として一人歩き出来るだけの何かまた余りにも強い輪郭を持ってゐて、その輪郭の故に我々に自らを名文とも受け取らせてゐるのではないかとも、危ぶまれるからである。ここには所謂〃一枚の木の葉も月を隠すに足る〃さういふ事情があるのかも知れない。〃知ることを欲する〃と言ふ。しかしそれはどれだけのことなのか。まさか〃欲する〃とは偶然の心理的・生理的な事実のこととは言はれないだらう。しかしそれは「それではない」とは言へても「それである」とは明示されないままに、実際上、通用してしまふのではないか。さうしてその同じ危機の中に他ならぬ我々のテクストがあるのを、筆者は認めねばならぬと思ふのである。『形而上学』冒頭が〃すべての人間

は、本性上、知ることを欲する〃と言ひ聞かせながら名文章であるやうに『ニコマコス倫理学』も〃すべてのしかじかは善を目ざす〃などと論じ立てながら、我々をうっとりとさせてしまふ。我々は、問題の設定そのものを、幸福にも、そのままその理解であるかのやうに、事実上我々自身を誘導してしまふ。〃欲する〃〃希求する〃〃目ざす〃〃願ふ〃等々といった言葉たちは、今も語ったやうに、それほどまでに強く輪郭を描いて我々に同意的に現はれる。

しかしながら、我々はヘーラクレイトスを亀鑑とするならば、その教へに従ってまさに〃ことわり〃に聞かねばならぬだらう。それら説得的な言葉の輪郭もさることながら、我々はそれらのロゴスを問はなくてはならない。言葉の強度に打たれるのではなく、言葉によって測定されてあるそのところに自己自身と魂とを揺るぎなく認めることが出来なければならない。我々のテクストは、それら一群の希求的な言葉を始めとして、善・目的・現実活動・成果・行為・終極的目的・国家的展開といった言葉たちをおよそテクストとして織り込みつつもその『序論』としての織り上げを「政治学のふさはしい聴講者は誰であるか」と問ひながら織上げようとするのであるが、それは次のやうな語り方ともなった上で、一方でかのヘーラクレイトスとも正しく響き合ふとともに、他方またこの我々自身に対しても、ことわりに従ってそれらの言葉を正しく計測しつつそこに自己のほどをも見出すやう、促してゐるとも見えるのである。すなはち、それはかう述べながら『序論』を終へようとするのであった。

然るに、ことわりに従って種々に自分といふものを広げてゆく行ひを我が身の上に計って行為してゆく人々にとっては、大いに益あることだらう、それら【人生を経験してゐるのだと人々に語らせるほどの諸々の実践】について知ってゐることは。（拙訳）

（一〇九五A10-11）

二

以上、筆者は我々がもし「倫理学とは何か」と問ふとすれば恐らくは伝統的に常識的な出発点であらう出発点に立ちながら、我々がそこに立つといふそのことで既に我々のことわりともなってゐるもののあることに、思ひを馳せて見たのであった。教訓はただ一つ、我々は言葉によって計られなければならないといふことであったと言へよう。しかしながら、また恐らくそのことは我々が正確に言葉を計るといふそのことでもあるのではなからうか。けだし、言葉によっては他ならぬ我々自身が計られるのならば、我々は我々自身として「まさにその言葉を計られたのだ」といふそのことを、その身に確かに知るのでなければならぬ。さうだとすれば、我々は言葉によつて計られるその受動の正しさによって、まさに言葉を正しく計ることも許されて来るのではなからうか。我々の努めるべきは、かくて言葉の奴隷などとしてではなくまさにその主人として、言葉を計って行くことであらう。だがしかし〝自己のほどを知る〟やうにと我々が測定して行かねばならぬその言葉は、この『序論』においてさへ如何にも数多く現はれてゐるだらう。我々はせめて幾つかの測定をなすことで、自らを制限しなければならないやうである。筆者はそこでテクストにおいての次の三つの言葉を測定することをもって、「自己のほど」といふものを幾らかでも明らかにする差当っての課題としたい。すなはち、高田訳・加藤訳の順序でその訳語を与へながら示すならば、

一　ἐφίεμαι　（エピエマイ）……私は希求する。私は目ざす。
二　τὰ πρακτά　（タ・プラクタ）……われわれの行なうところ。行為されること。
三　ἡ ὄρεξις　（ヘー・オレクシス）…われわれの欲求。欲求。

の三つである（一は1094a2　二は1094a18-19　三は1094a21に、それぞれ初出）。筆者は拙訳ではそれらに対して、一　私は私といふものを送りつける。二　行為されることを得るものども。三　自分を伸ばすその伸長。自己拡張。などといふやうに測定の刻みを些か意識的に刻み込んで見てゐるのである。所謂〝強ひて異を唱へる〟たぐひだと大方の不興を買ふことをも恐れるのではあるが、しかしそれでも敢へてそこに「自己のほど」を思って見るのである。ともあれ、作業にとりかかり批評を持つことにしよう。

*

一　ἐφίεσθαι といふこと

この『序論』とそれに続く第四章冒頭とを一つの文脈として我々が見るとすれば、都合三回用ゐられてゐることを我々は見出す。そして先に引用することもあった二つの邦訳のその後の理解の行方を追って見ても、それぞれ首尾一貫してそれぞれの訳語が通されてゐて、我々はそこに一つの注意が持続させられてゐるのを知ることが出来る。しかしながら、筆者はそのどちらについても些か不審に思はざるを得ぬことがある。それはかういふ不審である。すなはち、なるほど〝希求する〟〝目ざす〟といふ理解で理解するとして、『序論』たる第一章冒頭と『序論』に基づき再出発する第四章冒頭とは〝すべてのしかじかが、希求し、目ざす〟といふその意味でアリストテレスによっても一貫して思索を受けてゐると言へる。だがそれなら何故、第二章の末尾で ἡ μὲν οὖν μέθοδος ἐφίεται. と語られたとき、すなはち、直訳すれば〝されば先づ、方法がそれらのことどもを云々〟といふやうにただ語られただけのとき、その〝方法〟は断然〝われわれの〟研究であり〝この〟論究であるとさへも解することが出来るといふのであるか。文脈からしてさうだとか〝方法〟といふ言葉には冠詞があるでは

ないかとかといふ説明は、何か論点先取的なものとも疑はれるからである。何故なら、冒頭の起筆において〝方法〟が〝すべての技術とすべての方法とは、云々〟とふやうなその形の中で書き起されてゐたときには、それはただ全く「何らかの善を希求し、或いは目ざすのは、技術たり方法たるすべてがさうなのだ」とされただけであり、その〝すべて〟の中にアリストテレスらの倫理学的研究や政治学的論究を、善を希求し或いは目ざすそのやうなものとして最初からその身分を承認したその上でそれこそまさにその〝方法〟であるのだなどとは、それは断じて語ってはゐないはずだからである。否、寧ろそのやうな起筆においては、かう一つの願ひが心の中ではひそかに願はれてゐたとすべきだらう。すなはち、願はくば〝われわれ〟のこの研究もさうした〝すべての〟方法の一つでありたいと、である。アリストテレスは、言葉の真の意味で「われわれのもの」であるとも既に客観的承認の中で語られるところのその〝何らかの善きものに対する希求と目ざしたるもの〟はあくまで「方法や技術」といふ客観的存在のことだとなすのではなからうか。決してそれをただ我々の〝意のままになるべきもの〟とは見てはゐないのではなからうか。なるほど『序論』は自らを

> 先づは聴講者についても、また如何に論証すべきであるかに関しても、また何を我々は我々の課題として立てるものであるかに関しても、以上が序論としてものされたとせよ。（拙訳）（一〇九五A12-13）

と言ひながら締め括るのであるから、大方が〝アリストテレスらもまた、彼らの研究や論究をもって、善を希求し目ざしたのだ〟となすのには、一読「理由あり」とさせるものが何かあるかのやうである。だがそれも、しかし次の二点で当らないやうに筆者には考へられるのである。すなはち、

先づ第一に、実は『序論』の掉尾とも目されようこの第三章末尾の文章も、決して第二章末尾へまでは遡及することは出来ないと解されるのである。何故なら、右の引用に言及されてゐる〝我々の課題〟なるものとは、その言及の及ぶべき範囲

をば厳密に見るならば、それはただ第三章の〝自然本性に基づいては存在するとは思はれ難く、ただはかなく彷徨ふそのあり方であるだけとも見える「善いもの」を、しかし「そのやうなものどもについて」そして「そのやうなものどもから」こそ論ずるのだ〟となしたその発言にこそまさに及ぶのであり、それ以上ではないはずだからである。すなはち筆者は、この第三章の意味は第二章への一つの必要な補足を行なふところにこそあるのだと、さう解釈するのである。筆者は、我々の『序論』を今、次のやうにその論述の各展開に即して簡潔に把握しつつ、その点を考へたい。

【第一章】
- A 「技術・方法」・その〝善きもの〟の希求と目ざしたるもの (1094a 1-3)
- B 心が及ぶ目的の間の隔たり (1094a 3-6)
- C 行為の多と目的の多 (1094a 6-9)
- D 目的の収束と被収束 (1094a 9-18)

【第二章】
- A 終極的目的の存在 (1094a18-22)
- B 終極的目的の確認の意義とその素描の必要 (1094a22-26)
- C 〝国家統治の技術〟としてのその現象 (1094a26-b3)
- D 〝国家目的〟のその他の存在に対する総括 (1094b 4-7)
- E 「方法」の国家的展開 (1094b 7-11)

【第三章】
- A 論述と論証とのあり方 (1094b11-27)
- B 倫理学・政治学の聴講者の資格 (1094b27-1095a13)

最早筆者は筆者の読み方に拠りながら『序論』の要旨と見るところを示してゐるわけであるが、筆者は我々の『序論』と

は、右のごとく、第一章・第二章でもって既に一旦は一つの完結を見るものであるとも読まねばならぬとするのである。何故なら、テクストはさう読まれてこそ初めて問題の ἐρώτημα といふ言葉を無条件で「それは或る客観的存在者のことである」とすることを守り続けることを得るからである。すなはち、公刊された邦訳の〝われわれの研究はこうしたことがらを希求するものであり、云々〟といふのも（高田訳）〝さて、この論究の目ざしてゐるのはこれらの諸点であり、云々〟といふのも（加藤訳）何れも訳語の一貫性といふ点では首尾一貫〝希求する〟〝目ざす〟とされてはゐる。しかしながら、文脈の首尾一貫といふ点では、まさしく不首尾をなすものではなからうか。何故なら、右に筆者は〝われわれの〟研究とか〝この〟論究とかと言へるのも、それは本来ただ「一つのひそかな願ひ」によるのであり、すべての技術たるべき技術・方法たるべき方法のそれらの一つであるときこそだらうとなしたのであったが、たださういふ客観的存在の希求と目ざしだけがまさに希求とし或いは目ざしとしてアリストテレスのここで一貫して論じたい事柄であると推察されるから。はたして彼はさういふ脈絡の中へ、彼の〝希求と目ざしとがその客観的存在に達したそれであるのだなどと、ここで押しつけがましく主張しようとしたり或いは宣言することに逸ったりしなければならないのであらうか。さういふ主観的・主情的な彼をここに見るのは、寧ろ一つの解釈に過ぎないと筆者は考へたい。そして筆者はあくまでも冒頭よりここまで文脈は微動だにしてゐないのだと考へたい。客観的たるべき存在はどこまで客観的か、これこそが彼の思索でありそしてその文脈であらう。冒頭の技術・方法・行為・選択といふ問題的な四つの言葉も第二章末尾に至るまでに既に技術・行為・選択の三つについては触れるところがあった今、まさにその客観的なる存在として、これまでは触れられずに残されて来たその「方法なるもの」もまた、終に自らに言及せざるを得ないのだ。このやうな形での方法論としてのその方法論が仮に〝われわれの研究〟とか〝この論究〟とか言はれるやうなことがあるとしても、以上の中にあってはあくまでも第一章冒頭のその客観存在としての〝すべての方法〟と等価なものとして、常に、理解し直されなければならぬだらう。その意味での〝われわれの研究〟は、最早第三章末尾で〝われわれの課題は、云々〟と言はれる場合のその〝われわれ〟とは、身分が異なるものであらう。国家統治の技術と

方法はその客観的存在を信じ切られる。真に〝われわれ〟である存在によるものとして。考察されるされ方に何が素材であるべきか、さうした考察の課題ともなるべき課題には、ただ慎ましく自己を制限するだけである。人は、第三章末尾を第二章末尾に〝われわれ〟といふただその言葉の重なりだけによって、しかもおよそ無理とも思はれる解釈に基づいて〝われわれ〟といふ言葉を作りだしてまで、敢へて文脈を中断する何の理由もないだらう。第三章の第二章への繋がりは、寧ろ第一章と第二章との緊密な全体の一度の完結によって「方法」といふ言葉の客観性に触れてこそ、そこで初めて確保されて来るのではなからうか。

次に〝われわれの研究〟などと言っても決して不思議ではないのだとする立場への第二の反論は、殆ど右の中で準備されてゐるだらう。『序論』を語り終へたアリストテレスが『本論』を第四章より起すときにも、その筆は、あくまでも彼の一貫した *ἐρίεμαι* といふ言葉の使ひ方により、すなはち客観的・類的存在こそが真実 *ἐρίεμαι* するものなのだといふそれにより起されてゐること、このことが理由である。

> しかして我々は論ずることとしよう、最初の着手に戻ったその上で次のことを。すなはち、すべての認識・選択は或る何らかの善きものの場で自分といふものを伸ばしてゐるのであれば、政治学とは自らをそこでこそ送りつけてゐるのだと我々の論じてゐるもの、それは何であるのか。また何としてすべての行為可能なる善きことどもの中の最高のものはあるといふのか、この問題を。　（一〇九五A14-17）

再び拙訳でもってテクストを引いたのであるが、筆者がそれら三つを言葉として測定することを試み始めたすべてがこの一つの再起筆の中に現はれること、このことは注目するに足るだらう。何故なら、我々は着手と再着手、『序論』の冒頭と『本論』のそれとを、測定出来ぬよりは測定出来なければならないし、すなはち、そのやうにしてまた何が問はれ始めまた問は

れ続けるかを理解しなければならないからである。それはともかく、右によって我々は先づ我々の不審とするところを述べまたアリストテレスの問題の何であるかを示しながら、ἐρέσσω といふ言葉が本来用ゐられるべき筋道については、その幾らかの予備的把握には至ったかも知れない。だがしかし総じて振り返るならば、すべては我々を促して更にその我々の言葉へと接近するやうに、そして「すべてのしかじかが何らかの善きものを ἐρέσσω するとは、まさに我々の方法がさうしてゐることだ」と我々が見てとるやう、求めてゐるであらう。それ故、我々は我々の測定をもつと深めよう。

三

二度三度と既に敢へて拙訳でもってテクストを引くことにしてゐたし、またこの論考の冒頭においても公刊された諸翻訳の驥尾に敢へて付しさへしてゐたのであるから、何が筆者をして敢へてさう試みるべく強ひたのか、その必然的な理由を語る仕方で作業をして行かう。それは筆者にとって用例研究となる。

思ふに用例研究とは思索する姿のその探求であり、そしてその思索や思考の可能性はシュンタックスの可能性として実現するものであらう。その意味で、言葉の既に実現が確かめられてゐるシュンタックスを追認するかたちでその用例を採らう。古典時代のギリシャ人にとって彼らがギリシャ人であることのその教師であったホメーロスと悲劇作家に拠ることにすれば、全体でほぼ次の用法が核心的なものだらう。

1　ホメーロス『イーリアス』第二十四巻一一七行（能動形で send to one の意味で）

しかし更にはまたこの私、気象の大きなプリアモスにはイーリス女神を遣はすとしよう。彼がその慕はしい息子をば解き放って貰ふやうにとだ。アカイア勢の諸船の方へと出向いて行くことをして。して贈物をアッキレウスに持っても

ゆくと、それが心臓（こころ）を宥めよう。

2　ホメーロス『オデュッセイア』第十三巻七行（中動形で lay one's command or behest upon の意味で）

だが、あなた方の各々に、わが心の思ひとて、送りつけつつ、かうしたことをば私は言はう。

3　ホメーロス『イーリアス』二十三巻八二行（2に同じ）

だがもう一つ、ねえ君に私は言ふし、また頼んで指図もするだらう、もしも君が頼みを聞き届けてくれるなら。

4　アイスキュロス『縛られたプロメテウス』四行（2に同じ）

諸々の指図、それらをば父神ゼウスがあなたに対し（その心とて）送りつけてゐたのだが、

5　ソフォクレス『エレクトラ』一四三行（中動形で属格をとり long for, desire の意味で）

いったい何を、何をこの私には、それが悲嘆の数々のその中にあるといふにせよ、あなたはあなたのためとも、送りつけてゐるのです？

ヘーラクレイトスの「緊張と透明」といふのに対しアリストテレスの「対処とその構へ」といふものを我々は先に思ったのであるが、叙事詩と悲劇との両者のシュンタックスは問題のアリストテレスのそれに対してはどのやうに距離を測定されて来るであらうか。無論我々は、アリストテレスのシュンタックスが右の5の用法と殆ど重なるほどのものであることを、予め注意する用意はあるわけである。何故ならば、辞書はまさに我々のシュテレを採用し、中動形で属格をとればそれは最早 aim at といふ意味としてそのシュンタックスは理解されるべきものとなしてゐることを、実際知らされてもゐるからである。諸翻訳の〝希求する〟〝目ざす〟といふ訳語の採用もここに基づくと見ることも、決してただ推定するだけのことではないだらう。シュンタックスの可能性のニュアンスの問ひとして、その注意は注意されてよいと思ふ。

我々は右の用例を「どんな存在が、何を、どんな存在に、送りつけてゐるか」といふ観点で整理し直すことにしよう。何

故なら、先づ何と言っても第一のラディカルな意味は send to one といふのであるし、そこにこそシュンタックスの可能性もまた胚胎するはずだから。すると、それは次のやうになる。

	主体	何を	誰に
例1	ゼウス大神が	イーリス女神を	プリアモスに
例2	アンテノールが	これらのことを	老人たちの各々に
例3	パトロクロスが	もう一つの頼みごとを	アッキレウスに
例4	ゼウス大神が	指図を	ヘーパイストスに
例5	エーレクトラが	悲嘆の中からの何かを	コロスであるミュケナイの婦人らに

さて、このやうにそのシュンタックスを押さへ直すことも出来よう叙事詩・悲劇の持つシュンタックスの全体は、それとして何を語るだらうか。端的に言って、それはまさしく「ミュートス」といふ言葉だと言はなくてはならないだらう。何故なら、かの教師ホメーロスに学ぶ限りは「人間の言葉が、人間世界に、人間たち相互の繋がりの中で行為としての筋書きを筋書きすべく用ゐられる」といふそのとき、そのときの言葉の使用はミュートスとしてのそれなのだと言はれてゐることを我々は知るからであり、右の各々のシュンタックスは、まさにそのミュートス的枠組みの中での言語行為としてこそ見られるからである。それらは、従って、本質的には「命令」であり「脅迫」であり「言ひつけ」でもあらう。何故なら、これらゼウス大神以下の存在の言語行為に何がしかの意味があるとすれば、それは我々が例へば〝経験が物を言ふ〟とか〝真理は語る〟と言ふ場合の「経験」や「真理」の代はりに、固有名に存在を担はせて、その存在の果てから果てへと、物言はせてゐるからである。ミュートスの本質とは「命令」といふ言語行為だとして自らを示すさうした例を、[4]一つだけ引いて置かう。

『イーリアス』第一巻二二〜二五行である。

ここで、一方、他のアカイアの将たちは皆一斉に賛同の声を上げ、神官を恐れ敬へと、また輝く身代を受け取れと、かうその意を表はすのであったが、しかしアトレウスの子アガメムノンにはそれは心に適ふものではなく、否々、彼を悪しざまに追ひたてて、手酷い脅しの言葉(ミュートス)をば脅しつけたのだった。

かくて文字通りにミュートス的存在がミュートスとしての客観性の中で同じくミュートス的存在に先づ何かを送りつけてゐる。これが、それら文学のシュンタックスだとされるだらう。それはとまれ、しかし一体、何が、どのやうに、送りつけられるであらうか。ミュートス的存在のまさに存在が問はれて来るであらう。そして我々にはかう認められて来るだらう。すなはち、例の1からはゼウス大神なるミュートスの頂点にあるものには、送るものもイーリス女神といふ伝令つまり言語実現がその役目である神であって、そこでは意図と行為とは首尾が完結することが約束されてゐるといふ、そのことを知る。女神といふものが送りつけられるのだが、行為は純粋に言葉に置き換へられまさに言語行為の実現となり筋書きともなる。しかり、送ることはここでは完璧に能動的であることを得る。これらに対して例の2 3 4はどうであるか。意図と意図された行為の実現とは、その実現をば彼らがまさに気遣はなければならぬといふその分だけ、最初に既に或る亀裂の中にあるのではないか。さうしてこの亀裂は、用例の5に至って最大のものとなるのであらう。そして、ミュートスが客観的に明かであればあるだけ、それだけ送りつけられるものは事々しくなって行くだらう。「こと」とは「言」でありながらもまた、同時に「事」であり「異」であるとも見られるやうに。では、その事々しさとは、どのやうな形でまた事々しいのか。その形はかう言へよう。すなはち、それは聞くに聞き取れぬ異様であり、数々の悲嘆の中でも何が取り分けてエーレクトラの心のことなのかと、その悲嘆の真の姿がひたすらに訝られてゐる異様であらう。シュンタックスはこれを所謂属格と対格で示す。

〝数々の悲嘆〟といふ送られてゐるだらうそのたぐひ（類）は属格でその知識を表現され、さうしてその中でも何が殊更なのか（種）の疑念と無知とについては対格がそれを示す。すなはち、明白なものの属格と異様なものの対格とである。知識の只中に浮かばざるを得ぬこの無知こそが[5]、我々をして、〝狙ふこと〟〝目ざすこと〟〝執心すること〟を学ばしめ脅迫する。だが逆にそこからまた殊更のもの（種）もそれにこそ一部として含まれる類全体も、もしそれがその特殊を殊更には問はないとすれば、およそ全体としてその狙ひと目ざしとの場所であらう。実際、辞書リデル&スコットはそのやうな構文をホメーロスを去る古典期に生まれた文章として、整理してもゐるのである。例へばトゥキュディデス四巻六一節に〝しかじか云々することは、しかじかといふのではなくて、否シケリアにおける諸々の利益に狙ひをつけてのことである〟といふ下りを、我々は見るだらう[6]。

さて、我々は我々のシュンタックスの成立についてはやうやくにして、断を下すべく、すべての準備が成ったであらう。拙訳に *ἀγαθοῦ τινος ἐφίεσθαι* とあるのを〝何らかの善きものの場にもおいて自分といふものを送りつける〟などとも訳したのであったが、それは偏に以上の分析の中で問はれてゐた諸々の観点で、かかる「自己」としての存在たる技術・方法・行為・選択が如何なる存在であるかをまた分析する必要を思ったからであった。我々はミュートスの明らかさの中で言葉を送りつけるその「自己のほど」によって、ゼウス大神といふ至高の頂きの存在からその意図の行為としての実現を気遣ふ内なる存在へ、そして「知るも知らぬも」ともかくも狙ふものと狙ふものどもとは彼にあるその存在へ、そしてまさしくその先に「知るも知らぬも」といふことでは同じだが、しかし「そこでこそ狙ひは唯一つと定まるべき」その唯一の標的がその「自己」にとっては狙ふほどのものでなくてはならぬ、その存在が存在する。無論それがすべての技術とすべての方法の、その「自己」であり、その「存在」であるだらう。

四

我々は、今や我々の次の課題へ移ることも許されよう。何故なら、我々の測定しようと言ってゐた次の課題は τὰ πρακτά（行為可能なことども）といふのであったが、以上によれば、存在者がその存在で存在してゐるとは、実にその可能な行為に関してこそ存在することであったからだ。さうして、しかし同時にまたそのやうにして我々のテクストに我々が向かふとき、我々は最早、残るもう一つの我々の課題へとも向かふべきことを教へられるのである。第二章冒頭（1094a18-22）に向かったときのことである。（――我々の測定課題の二 τὰ πρακτά 三 ἡ ὄρεξις は、かくて同時に測定される。）

もしも、実にここで、何らかの形の【或る終極的なる】目的がそれら諸々の【純粋に】行為されることを得るものの中にはあり、それをこそそれ自体の故に我々は欲するが、しかしその他の諸々はそのものの故に欲する、さうしてすべてのものは別種のものの故に選んでゐるわけではないのだといふことであれば（何故なら、とまれこのやうにしてなら無限遡及といふこととなり、そこでまた空疎で無駄なものとも我々のその自己拡張はなる、とも言へるから）、そこでは明らかであるわけだ、如何にもそのものとしてこそ、先づその善きものは、つまり最善なるものは、あるだらうとは。

我々はこれに、既にこの論及の第二章（七〇頁）で ἐφίεμαι といふ言葉のなす文脈の一貫した客観性などと言ってゐたときに引いてゐた『本論』冒頭の第四章の起筆の文章を、なほ加へてもよい。何故なら、これらに我々が認めるのは、ただ全く次のことだけであらうから。すなはち、曰く「すべての技術そしてすべての方法は、それらが全体としてそのたぐひ稀なる類的存在であるとき、それは、この我々がそれをこそ、それ自体の故に欲した、その我々の純粋な選択といふもの、つま

り唯一のとも呼ぶべき終極的目的への、我々の、我々による、我々のための、その或る伸長としても、実に結実しなくてはならぬ。もしもさうであるならば、云々」と。すなはち、よし例へ第二章冒頭は結実を期待し第四章冒頭は結実から問ふてゐるといふそれだけの落差はその間にはあるにもせよ、しかしこのやうに第一章冒頭の起筆に比べれば、最早はっきりと「狙ひは結実としてこそあれ」とするそこにおいて既に重心を移してしまってゐるからだ。しかしながら、我々はそもそも何故にかう重心を移したのであったか。それは、無論「我々の技術と方法たるものは我々の存在として何でも善いものは貪るのだといふのではなく、何か善きものをこそ狙ふのだ」といふ、そのことの故にであった。——我々はこの「善きものども」を貪るのではなく「何かの善きもの」をこそと希求し目ざし狙ってゆくことに自己自身をかけ、そのほどを試すその行為は、かのエーレクトラの嘆きにも何ら勝るとも劣ることなく「ただ純粋に行為であるのみ」と、はたしてこの今に語るべきではないだらうか。そして、その純粋なる行為こそ「行為可能なものども」であり、純粋ならば「それはただ伸びる」のであらう、神々にもまた「それぞ成就」と嘉されるまで。

だがそれにしても、その「純粋行為」の選びの場所はその行為においてこそ存在しようとするその存在の明らかになるそれであった。我々のテクストはこの点での我々の心身のあり方（ヘクシス）を〝射手と標的〟との比喩でもって比喩するやうであるが、今は我々は彼の『創作論』第六章に拠らう。

> 然るに、「行為こその」といふ意味で描写はあり、その行為がそれとして行為し出されて来るのは或る現に行為しつつあるその人々によってなのであるが、その人々とは人となり（エートス）と考へ方（ディアノイア）とにおいて或る何らかの者であることは必然であるからして（何故なら、それらを通じてこそ諸々の行為もまたそれぞれ何らかの性質のものであるのだと、かう我々は主張するからである）、既にもともと生じてゐるのである、原因なるものとして二つのものが「諸々の行為のそれなのだ」といふその意味で。そしてそれらの行為に従って、人はかつは成功しかつは失敗する

のである。（一四四九B36以下）

我々は幾度かミュートスの客観性とか明らかさとかと言ったのだが、しかしそれは「原因」といふ言葉までをその膝下に置くものではなかったのである。人は、かくてプラトンの対話篇『国家』におけるかの「魂の機能の三部分の説」による思索を、ここから望見することも出来るのではないか。何故なら、その思索の課題としたのはまさに「何か一つの善きもの」を人間存在としてどう語りどう嘆くかといふことであったし、[7] 加へてこれはアリストテレスもまた我々のテクストにおいてその第一巻最終章（第十三章）で、何れも人間存在の卓越性（アレテー）のこととして語り分けながら、その師と同じ土俵に立ったことなのだからだ。――倫理学とは何か。それは、単純に答へられなければならない。曰く「行為の一つの原因としての人となりの卓越（テーティケー・アレテー）の真似びである」と。人間存在の思考も一つの志操であるが、その人となりもまた眼差しであらう。無論。かの「一つの善きもの」へのである。二つして「人はそこでこそ人として生きてゐるであらう」といふ国家なる純粋現象のその下で、エートスのその真似びはポリスのそれに、遙かに続くもののやうである。

或いは殆ど蛇足に堕すことだらうが、ソクラテスがかの『パイドロス』（二七六D以下）で我々の我々による諸々のエートスの中での「文字の種蒔き」といふことを語ってゐることを、筆者はここで思ひ出す。ここでのエートスといふ言葉はこれもホメーロスとともに古いものであって〝生き物の繁く通ふ場所〟といふ意味合ひなのであるが、言葉とともにある我々のかの場所をであらう、永久の交流としてかう語る。

パイドロス

まさしく見事なものに「慰み」を、あなたはお話です、下らぬそれに比べれば、ソクラテス。言論の中で慰むだけのことが出来るやうなその人の慰みですけれど。つまり彼は『正義』とかその他あなたが論じてをられるそれらのことどもに

ついて、物語をして行きながら慰むのですが。

ソクラテス

実際、その通りなのだものね、親しいパイドロス。しかし思ふに、もっとだよ、もっと見事な真剣が、かうそれらをめぐっては生まれるのだよ。すなはち、それは或る人が問答するに相応しいだけの心得を用ゐつつ、魂ももうふさはしさを身につけたのを得た上で、植えつけてはかつまた種を蒔くのに知識に伴はれた諸々の言論をもってなす時なのだが、それらはそれら自身でもってして、その植えつけた人に対しその助けとなるに十分であり、また実りなきものなどでは決してなく、否、種子を胚胎しながらに然りなのだ。そこからして言論は、種々のそれらが種々の蒔き場（エートス）（牧場）にと、自分といふものを植えつけてゆくことでそれを永久に不死のものとして差し出すに足るのであり、また種子を持つ者はこれを幸福にすること、これ、この人間の身にとりすぐれて可能なその限りとも、なってゆくのだ。

我々のアリストテレスにもまた、かの若き日のアレクサンドロスがゐて、また愛しきニコマコスがゐたであらう。さういふそこに、筆者はあらゆる意味で我々の「自己のほど」があると思ふのである。

註

(1) 原文テクストは I. Bywater : Aristotelis Ethica Nicomachea. Recognovit brevisque adnotatione critica instruxit (OCT). 1962 による。

ロス訳は Aristotle, Ethica Nicomachea. Translated by W. D. Ross. Oxford. ("The Works of Aristotle, translated into English" vol. IX) 1925 による。

高田訳は　岩波文庫版第20刷　1988による。
加藤訳は　アリストテレス全集　13　ニコマコス倫理学　加藤信朗訳　岩波書店　1973　による。

(2)　最も手近なところ加藤教授前掲書の註において(p. 359-360)それらこそ実に問題的なのだとすぐさま知らされるやうに、「ものみなは或るひとつの善いものを目ざす」といったことのその一方における何かしらの分かり易さとは如何にも対照的に、他方で「技術・方法（研究・論究）・行為・選択の四つが、どういふ身分のものとして、それ自身でも相互においても、あるものなのか」といふ問題が、焦眉の問題として現はれてもゐるだらう。しかしながら筆者は「焦眉のその問ひをどう解いてゆくのか」といふその解き方は可能な限り単純たるべしと思ふ。「技術と方法」そして「行為と選択」といふ形で一対に理解しながら解くといふのは(それがゴーティエの示唆であり、教授も賛成されるわけだが)、如何にも確かに単純であらう。アリストテレスのここの文章は、まさにその姿であると言へようから。だがしかし、それでは〝すべての云々は〟といふ類的・全体的・全称的存在を語らうとする言葉はそれら一対が一対であるそのことに対し、全く等しくattributeされるべきものなのか。諸訳の示す理解に対し、筆者はそこを疑問に思はざるを得ない。推察するに、諸訳の理解はすべて一旦はあり方をそれらで一対であると見たのだが、にも拘らずその見方を、希求と目ざしとは〝万物〟と〝ものみな〟こそのそれなのだといふその「分かり易さ」によって、事実上、放棄するに至るのではないか。〝同じく〟とか〝同様に〟とか言はれてゐるそのことの理解が、その「分かり易さ」の路線でしか解かれてはゐないからである。「我々の解き方はその分かり易い線で尽くされる」とすべき必然は、コムマを打っての上で〝同じく〟とか〝同様に〟とか言はれる場合には、寧ろ弱くなるものだらう。筆者は、そこを単純に、先の一対を社会的存在としたときに後のそれがそこから必然的に誘はれてそれ以前のものとしてこそ気づかれる、さういふ基礎的存在への回帰なのだと解釈して見る線も、その〝同じく〟といふことの解釈の線として、十分に単純だらうと見るのである。そしてその単純がまた〝希求する〟〝目ざす〟といふ言葉をそれと同類の〝欲求する〟〝願ふ〟〝欲する〟その他の言葉との雑居から引き離し、構文的に単純化し還元する必要を、筆者に示唆するのである。このことは、プラトン『パルメニデス』一二九B以下での *ἀπεφήναντο*（自分の見解を表明する）といふ言葉に学んでその線から以下の続き方を見るときには、更に「例へばエウドクソスこそ〝万物の善希求説〟の論者だ、といふやうな解釈は排されるべきであり、筆者の訳の如く、アリストテレスがアリストテレスとして人々を振り返りまた自説を確信してゐることが真実だ」とする筆者の理解にも、また繋がるのであった。さてしかし、この論及の性格上、

その焦眉の問題への各研究・諸解釈への精査には主題的には至り得なかった。

（3）『分析論後書』『政治学』『形而上学』の各冒頭参照。

（4）プラトン『プロタゴラス』（三二〇C）での智者プロタゴラスのあっさりしたミュートス規定も、その本質はかうしたことだとは言はなくてはならないだらう。また同じく『ソフィステース』二四二C。

（5）プラトン『メノン』のかの「探求不可能」を語るソフィズム（八〇D以下）と比較することは、有益であらう。

（6）すなはち、第一には複数属格の形の全体の中にその中の何か一つのものが対格で狙ひの対象となり、第二にはただ複数属格の全体がそれだけで狙ひの場所とされ、そこからまた無差別に狙ひの対象ともなるわけだが、我々のテクストの〝何がしかの善きもの〟を何かしらこの第一と第二との中間的なものとして〝単数属格で場所にして対象であるあり方をある〟と認めるとき、次の比較も興味深く思はれる。それは第二の狙ひ方の複数属格で〝顔において（＝顔を）〟〝両眼において（＝両眼を）〟といふやうな用例がプルータルコスに見られるとき、筆者は自づとプラトン『プロタゴラス』三二九C以下の「アレテーの全体・部分の問ひ」を「顔の全体・部分のそれ」として問ふソクラテスの問ひ方を思ひ出す、といふことである。この問ひ方も、智者プロタゴラスの「アレテーの要求とは人間世界の現実だ」とするミュートスの明らかさの或る納得の上に、全くソクラテスにこそ独自に始まる問ひとして、問はれ始めるからだ。

（7）プラトン『国家』四三九E以下に「『欲望』に助勢は不用、『ロゴス』には『テュモス』（気概）が必要」と語る。

目次

一　比較の可能性
1　考察の方法としての或る比較……六一頁
2　ヘーラクレイトス『断片』四五・そのアフォリズムなるもの……六二頁
3　『ニコマコス倫理学』序論・その説得的なるもの……六三頁

4 「自己のほど」の堅持の必要性……六四頁
二 エピエマイ（ἐφίεμαι）という言葉への対処について
1 教訓と課題……六五頁
2 エピエマイという言葉への二つの対処に対する不審……六六頁
3 不審の理由（その一）、『序論』第三章末尾の第二章の結論に対する遡及不可能性……六七頁
4 不審の理由（その二）、エピエマイ・その客観的脈絡を語るもの……七〇頁
三 用例研究
1 思索の可能性としての叙事詩・悲劇におけるエピエマイの構文の問ひ……七一頁
2 構文の透視・ミュートス（筋書きする行為）としてのコスモス（客観世界）……七一頁
3 構文・そのミュートス的各存在の意図と行為との一致・亀裂によるもの……七四頁
4 『ニコマコス倫理学』冒頭のシュンタックスへ……七五頁
四 倫理学とは何か
1 タ・プラクタ（純粋行為）とヘー・オレクシス（その伸長・成就）……七六頁
2 ディアノイア（思想）とエートス（人となり）……七七頁
3 或る文字の園・プラトン『パイドロス』二七六D以下でソクラテスの語るもの……七八頁
4 結び……七九頁

（昭和四十一年本学大学院修士課程修了・福岡大学人文学部教授）